

シェイクスピアの『冬物語』におけるヒューマニズムと信仰
(2023年度文学部英文学科公開講義「いま、古典を読むこと」Proceedings)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石橋, 敬太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000136

シェイクスピアの『冬物語』における ヒューマニズムと信仰

石橋 敬太郎

序

弱体な政権基盤を強化しようと、有力貴族に惜しみなく恩賜を授け、多額の費用を支出していたほか、王妃アンの浪費癖もあって、イングランド国王ジェームズ一世の王室費はいつも枯渇していた。事態を解決するために、1610年2月、ソールズベリー伯ロバート・セシルは、ジェームズ一世に年間20万ポンドの収入を確保する権利を与える代わりに、後見権や徴発権など封建制度由来の権利を放棄することを議会に提案した（Davies 14）。「大契約」（グレート・コントラクト）と呼ばれるソールズベリー伯の提案は、地租などから確実な収入を国王に確保することと引き換えに、議会が国王の財政収入を監督し、封建領主を財政負担から解放する先駆的なものであった。この政策を推進するために、同年3月の議会においてジェームズは次のような演説をした。

...the state of monarchy is the supremest thing upon earth. For kings are not only God's lieutenants upon earth, and sit upon God's throne, but even by God himself they are called gods. There be three principal similitudes that illustrates the state of monarchy. One taken out of the word of God, and the two other out of the grounds of policy and philosophy. In the

Scriptures kings are called gods, and so their power after a certain relation compared to the divine power. Kings are also compared to fathers of families, for a king is truly *parens patriae*, the politic father of his people. And lastly, kings are compared to the head of this microcosm of the body of man. (Tennehouse 150)。

ジェイムズの演説では、世俗の権力はアレゴリカルに神のそれと結びつけられているが、最終的に「神」「国王」「父」が相互に交換可能な概念として表されている。この演説によって、議会は、財政的に安定した国王による絶対王政化と貿易商人などに対する新たな課税を危惧し、議論を続けた (Davies 14)。ジェイムズは、5月の議会において彼らの怠慢と遅延を非難したほか、国王大権について論じることを禁じた。同年11月、議会はソールズベリー伯の提案の審議を拒否する (Davies 14)。この国王と議会との緊迫した状況のもとで、シェイクスピアの『冬物語』は執筆され、1611年5月に国王一座で初演された。本劇に関する先行研究では、こうした当時の政治的な文脈から、劇中の神々をジェイムズに重ね合わせる事が、作品解釈の重要な鍵であると考えられてきた。

その詳細は次のとおりで、劇中におけるアポロの神託——王位継承者の発見による王国の再生——の実現は、神の代理人を自認し、家族と国家の類似性を利用して、臣下の父として絶対的な支配権を行使するジェイムズ一世の支配原理を基盤で支えていると考えられてきた (Williamson 112)。また、終幕でのシチリア国王レオンティーズと彼の王妃ハーマイオニ、そしてポヘミア国王ポリクシニーズとの和解は、ジェイムズが国内外の平和と繁栄に向けて、政治的な悲劇を悲喜劇に転じようとする政策を映し出していると解釈されている (Wickham 33-48)。さらに、パーディタとフロ

リゼル王子との結婚をジェイズの娘エリザベス王女とプファルツ選帝侯フレデリック五世とのそれに重ね合わせる見解も生み出してきた (Yates 32)。このような批評史から、神々 (=ジェイズ一世) の導きのもと、人間の忍耐と改悛によって幸福な世界を回復するという本劇の筋立ては、いかにジェイズの王権を支えているかがわかるであろう。

それにしても、根拠のない嫉妬に苦言を述べられて、ポーライナを魔女と呼んだレオンティーズが、終幕でハーマイオニの彫像に生命を吹き込む彼女の術を正当な行為と認めたことについて、どのように考えたらよいのであろうか。ジェイズ一世が偶像崇拜を教皇主義として徹底的に批判していたことを文脈とするととき (James 303)、レオンティーズの見解は謎に包まれてしまう。フィーベ・ジェンセン (Phebe Jensen) やウォルター・S・H・リム (Walter S. H. Lim) によると、ハーマイオニの生命の復活の場面は、カトリック主義擁護に向かう初期近代イングランドの実際を示しているという (Jensen 279-306, Lim 317-34)。確かに、劇中においてポーライナが彫像に命を吹き込んだ後で、レオンティーズたちが彼女の教会堂に行き、「そこで、食事をするつもりだ」 (“there / they intend to sup”) (V. ii. 102-3)¹ と仲間に語る紳士の言葉は、パンとワインがイエスの肉と血となるカトリックの聖餐式を思い出させる。当時の祝祭に対する宗教改革者たちの見解を駆使したジェンセンたちの論考は説得力があるのだが、自制心を失いながらも、レオンティーズの威嚇にひるむことなく、勇敢に国王に正当な意見を述べるポーライナについては詳しく触れていない。

おしゃべりで口やかましく、医者および助言者として、レオンティーズ

1 以下、シェイクスピアからの引用ならびに幕・場・行数表示は、William Shakespeare, *The Winter's Tale*, ed., J. H. P. Pafford, The Arden Shakespeare Edition (Methuen, 1963) に拠る。

に改心を迫り、アポロの神託を信じて、ハーマイオニとの和解を可能にするポーライナに着目するとき、彼女の言動には、保守的な神中心の世界観に対して人間そのものの価値を見出そうとするヒューマニズムが垣間見えるのである。すなわち、当時のストア派の伝統では、神の創造物である自然は、自然法によって支配され、秩序、価値や目的を有しており、人間はその目的論的な意匠から免れなかった。なかでも、ストア派の流れをくむエリザベス朝の国教会の神学者リチャード・フッカーは、人間の本性が自然の創造主たる神に内在すると主張していた(1: 209)。

しかし、17世紀になると、ストア派の伝統的な自然観に導かれる人間観から解放されようとする思潮が現れてくる。たとえば、フランシス・ベーコンは、経験主義的な手法によって自然界の出来事を解明しようとする。後に、トマス・ホップズは、人間を自然にまざる存在と考える。舞台上目を向けてみると、パーディタは、人工も自然の一部とするポリクシニーズの自然観に異議を唱える。フロリゼルも、父王の存在を軽視してパーディタとの結婚を望むことによって、家父長制度の根幹を動揺させる。ほんの一瞬の出来事ではあるものの、若い二人の言動には、人間の自覚を促すヒューマニズムが描出されている。最終的に魔術が人間の術と認識され、シチリアとボヘミアの結合までもが実現する。こうした驚嘆すべきことが実現するには、ポーライナによると、「信仰」が必要とされる。彼女のいう「信仰」とは、神々の支配する世界においてすら、人間が人間を信じる力を我々に認識させることではなかったか。以下においては、ポーライナ、パーディタやフロリゼルのヒューマニスティックな言動に着目して、この時代の人々の精神史の一端を描出する劇作家の試みを明らかにしてみたい。

I

シェイクスピアの『冬物語』の基調をなすのは、イングランド国王ジェームズ一世の支配原理である。その支配原理は、レオンティーズが突如として王妃ハーマイオニに嫉妬し、国王の言葉が法律であるとして、カミロやアンティゴナスなど廷臣たちの助言を拒み続ける冒頭の場面から見られる。この場面は、嫉妬から王妃ベラリアと彼女の子どもフォーニアを死に処するよう命じるバンドストに対して、宮廷の酌人であるフラニオンと宮廷人たちがその命令の撤回を求めた本劇の材源『バンドスト』に倣ったものである (Bullough 8: 168)²。このような場面が描出されたことについて、ステュアート・M・カーランド (Stuart M. Kurland) は、当時のイングランドにおいて国王が廷臣の適切な助言に耳を傾けることが重要な政治的課題であったことを指摘する (365-86)。確かに、「大契約」の失敗がもとで有能な政治家ソールズベリー伯は失脚し、カトリックのノーサンプトン伯ヘンリー・ハワードなど宮廷人たちが国王の寵愛を得て、政治をコントロールしようとせめぎ合い始めていた (Ferguson 164, 180)。

このような政局を予期してか、フランシス・ベーコンは、彼の『隨筆集』のなかで「国王は国家の悪習を教え、ためになる方向を示唆してくれる、誠実な顧問官をもたなければならない」と警鐘を発している (VI: 423)。しかも、ときのヒューマニストたちは、政治上の問題に適切な助言を与えられる人材の育成を教育目標の一つに掲げ、事態の改善を急ぎ出した

2 以下、グリーン『バンドスト』(Pandosto) (1588) からの要約は本書に拠る。なお、材源では、ハーマイオニに相当するベラリア王妃が、潔白とはいえないものの、夫バンドストの機嫌を損なうことがないよう、彼の友人エジストゥス国王の寝室に赴くこともたびたびあり、夫から疑われてもやむを得ない振る舞いが見られた。バンドストの嫉妬が妻と彼の親友との罪のない親しさを目撃するうちに徐々に醸成されていく点において (158頁)、レオンティーズのそれとは異なる。

(Crane 1-15)。ベーコンをはじめとするヒューマニストたちの理想的な廷臣像は、劇中のポーライナに継承される。彼女は、『パンドスト』には登場せず、シェイクスピアの創造である。そのポーライナは、絶対的な王権を確信して、嫉妬から罪なきハーマイオニの言葉や廷臣たちの助言を次々と拒否し、破壊していくレオンティーズに歯止めをかけようとする。それではなぜ、劇作家は、男性の廷臣ではなく、国王に助言をするのにふさわしい地位を与えられていないポーライナにこの役割を与えたのであろうか。しかも、エリザベス朝とステュアート朝のコンダクトブックや説教などにおいて、口やかましい女性は批判の対象であった (Matz 85-92)³。

事実、レオンティーズの暴挙と威嚇に屈することなく堂々と苦言を呈したポーライナは、彼から「人間の姿を借りた魔女」(“A mankind witch”) (II. iii. 67) と呼ばれる。このような女性は、男性を脅かす「他者」として家父長制度において欠点とみなされており、それこそ魔女として烙印を押されたかもしれない。ここで着目したいのは、ポーライナがレオンティーズを批判する「役目は女性がもっともふさわしい」(“the office / Becomes a woman best”) (II. ii.31-32) とハーマイオニの侍女エミリアに述べたことである。ポーライナによると、女性には「ウィット」(知識や教養)がなく、伝統的に「口やかましく、おしゃべり」で「無分別」な存在である。言い換えるのなら、劇作家は、女性に特有の属性を逆手にとって、ポーライナにレオンティーズを批判させる。

And, I beseech you hear me, who professes

3 1591年の説教において、説教師ヘンリー・スミス (Henry Smith) は、女性には知恵も信仰心も忍耐も期待できず、口やかましく、言葉を慎むべきと忠告している。

Myself your loyal servant, your physician,
Your most obedient counsellor, yet that dares
Less appear so, in comforting your evils,
Than such as most seem yours;

(II. iii. 53-57)

ポーライナは、「医者」また「従順な助言者」としてレオンティーズと向き合っているものであり、決して彼のいう魔女ではない。むしろ、彼女の言動には、ベーコンなどヒューマニストたちの廷臣の選択に関する助言が見出せる。それが明確に示されるのは、次節で述べるように、ハーマイオニの裁判の後の場面である。この裁判では、アポロの神託によってハーマイオニの無実が宣言される。だが、グリーンのパンドストとは異なり、レオンティーズはアポロの神託まで拒否する。その際に、アポロの神託を拒否した罰としてのマミリアスの死は、神の代理人であるジェームズ一世の支配原理を強く観客に印象づけたかもしれない。

II

アポロの神託を拒否した後、ポーライナからハーマイオニの死を告げられて正気を取り戻したレオンティーズは、「いままでのように、真実をはっきりと伝えてくれ、そのほうが同情されるよりはるかにありがたい」(“Thou didst speak but well / When most the truth: which I receive much better / Than to be pitied of thee”) (III. ii. 232-34) と述べて、彼女を受け入れる。そのことは、ポーライナの「口やかましく、おしゃべり」で「無分別」な女性の言動が貴重な教訓に変換されたことを意味するであろう。彼女の教訓は、レオンティーズが自らの非を認め、「日に一度、二人の眠る教会堂

を訪れ、そこで涙を流すのを唯一の慰めとしよう」(“Once a day I’ll visit / The chapel where they lie, and tears shed there / Shall be my creation”) (同 238-40) と語ることで高められる。彼が改心してカミロを忠実な人間と再認識したことも、人間そのものの価値を評価する当時のヒューマニズムを思い出させてくれる。ポーライナの女性としての言動がレオンティーズの専制的な暴力に対抗できる唯一の手段として高められた理由として、アン王妃を取り巻く宮廷女性たちのなかでもっとも有力な女性であり、文学者たちのパトロンでもあったベッドフォード伯爵夫人の存在が考えられているが (Lewalski 98), はっきりとしたことはわからない。少なくとも、ポーライナの「口やかましく、おしゃべり」で「無分別」な言動がヒューマニスティックな教訓として変換されていることだけは確認しておきたい。

神の代理人としてのジェイムズ一世の支配原理を背景として、本劇が執筆・上演された時期に現出しつつあったヒューマニズムを描く劇作家の試みは、ボヘミアの場面にも見られる。すなわち、グリーン『パンドスト』では、パーディタに相当する生まれたばかりの赤児フォーニアは、船に乗せられ、運命にゆだねられて、シチリアの海岸に漂流する (Bullough 8: 173)。他方、シェイクスピアの『冬物語』では、シチリアの海岸がボヘミアの海岸に置き換えられるほか、レオンティーズの命令に従ったアンティゴナスがパーディタを捨てる場面が用意される。シチリアとボヘミアが置き換えられたことに関しては、はっきりとした理由はわからない。むしろ、この場面で着目したいのは、アンティゴナスが夢のなかに現れたハーマイオニの言葉を信じて、パーディタをボヘミアの海岸に捨てたことである。

Affrighted much,

I did in time collect myself, and thought
This was so, and no slumber. Dreams are toys:
Yet for this once, yea, superstitiously,
I will be squar'd by this.

(III. iii. 37-41)

夢を信じた彼の行動にはローマ・カトリック教会の伝統が見られるとリム
はいう (322-23)。なるほどそうかもしれないが、夢を信じて行動するアン
ティゴナスのなかに、出来事を動かす人間の動機が見出せないだろうか。
すなわち、彼の行動には、この世の出来事を超自然的なものではなく、人
間の動機や行動から解釈しようとするヒューマニスティックな時代思潮も
垣間見えるのである。もちろん、アポロなど神々をジェームズ一世にたと
える文脈からすれば、邪悪なレオンティーズの命令に従ったアンティゴナ
スは熊に食い殺され、パーディタを運んだ船と乗組員は嵐の海の犠牲にな
らなければならない。こうした体制側の支配原理は、グリーンのフォーニ
アが羊飼いポラスと彼の妻モブサによって養育されていることとは異なり
(Bullough 8: 174-76)、シェイクスピアのパーディタが羊飼いと彼の息子
に育てられていることからわかる。劇作家が母ないし妻を劇中から排し
た理由について、マリリン・L・ウィリアムソン (Marilyn L. Williamson) は、
女性の生殖性を吸収するジェームズの家父長制を表しているという (146-
48)。

III

ジェームズ一世の支配原理を背景としてアクションを展開するなかで、
シェイクスピアの視線は、再び現出しつつあったヒューマニズムに向けら

れる。それは、王子フロリゼルが羊飼いの娘に恋をしているとのうわさを聞いたポリクシニーズとカミロが、息子の行動を探るために変装して羊の毛刈祭に現れる場面に見られる。この場面では、カーネーションと斑のナデシコをめぐる「自然と人工」の議論がパーディタとポリクシニーズとの間で交わされる。パーディタによると、それらの花の赤と白の斑模様は、偉大な造化の自然に人工の手が加わってできた私生児であるという。ポリクシニーズは、その人工の手を生み出すのも自然であるとして、彼女の自然観をはねつける。この議論において重要なのは、ポリクシニーズが人間の作り出したものも神の創造である自然の一部として彼女に印象づけていることである。本劇が執筆された時期、フランス・ベーコンが観察と実験によって自然界の出来事を解明しようとしていたことを背景とすると、ポリクシニーズの自然観は、現出しつつある新しい自然観を否定するものであった。そのことはまさに、ジェームズのストア派の自然観に基づく支配原理を支えるものであったであろう。

しかし、パーディタは、「一茎でもあの花を植えるのに土を掘る気はありません」(“I'll not put / The dibble in earth to set one slip of them”) (IV. iv. 99-100) と述べて、ポリクシニーズの自然観に反論する。再び、パーディタがジェームズ一世の自然観を否定していることも見逃せない。その結果、グリーン『バンドスト』の副題である「時の勝利」は、時の経過のなかで真実が現れ出るという意味をもっていたのだが (Bullough 8: 156)、シェイクスピアの舞台では新しい時代思潮を前にした「羊飼いの娘とそれにまつわること」(“A shepherd's daughter, / And what to her adheres”) (IV. i. 27-28) が「時」の主題となる。フロリゼルも、身分の相違や父の存在を軽視した結婚観を展開して、ポリクシニーズの怒りを買う。すなわち、変装を脱ぎ捨てたボヘミア国王は、息子の相続権を奪うのみならず、人類の

祖デユカーリオンよりさらに昔にさかのぼって縁を切るという。

If I may ever know thou dost but sigh
That thou no more shalt see this knack (as never
I mean thou shalt), we'll bar thee from succession;
Not hold thee of our blood, no, not our kin,
Farre than Deucalion off: mark thou my words!

(IV. iv. 428-32)

ポリクシニーズの言葉は、『バシリコン・ドロン』のなかでヘンリー王子に同じ地位と宗教をもつ女性との結婚を求め、「最初に自らの地位より卑しい人と結婚すれば、その後評価されないであろう」と助言したジェイムズ一世のそれを代弁している(172)。息子の結婚に対する彼の強い関心の背景には、家父長制度の強化による王国の安定があった。ただし、ポリクシニーズがフロリゼルを廃嫡すれば、シチリアと同じように、ボヘミアでも王位継承者は途絶えてしまう。シェイクスピアが身分差によってもたらされるグリーンのドラスツスの結婚のためらいをフロリゼルから切り捨て(Bullough 8: 179)、最初から彼をパーディタの誠実な恋人として描いていることも忘れてはならない。本劇の見どころは、いかにパーディタがシチリアの王女であることが発見され、王国を再生するかにある。これを助けるのがカミロである。劇の前半において、カミロは、ポリクシニーズの逃亡を助け、今度は王子と王女をシチリアへ逃亡させて、二人の結婚による王国の再生の担い手となる。

シチリアの宮廷では、レオンティーズが悔恨と祈りの日々を送り続けている。廷臣たちは、王国の継承と安定のため彼に結婚するよう駆り立てる。

もちろん、神託とポーライナの許可を得るまで結婚しないと約束を守ると固く誓ったレオンティーズは、彼らの言葉に耳を貸さない。ここでは、国王を神ではなく、人間として考えた古い演劇上の伝統が喚起されている。フロリゼルとパーディタが登場すると、レオンティーズは、彼らを「大地が春を迎えたようだ」(“As is the spring to th’earth”) (Vi.151) と喜び、迎え入れる。そして、彼は「私が今、お二人のように立派に成長した息子と娘を見ることができたなら」(“Might I a son and daughter now have look’d on, / Such goodly things as you”) (同 176-77) と王位継承者の不在を深く嘆いた後で、結婚を許されない二人の擁護者としてポリクシニーズと会う約束をする。いきおい、アクションの展開は、レオンティーズがこの難題をどのように解決するのかにかかってくる。だがこの後すぐに、羊飼いの老人がもっていた包みと当時のいきさつの報告によってパーディタの身元が判明し、父と娘が対面したことが紳士たちによって語られる。ジェームズ一世を体現するアポロの神託どおり、王位継承者の発見によってシチリアとボヘミアの両王国は再生される。

IV

パーディタとの再会後、レオンティーズたちは、ポーライナの招きによって、不世出のイタリアの巨匠ジューリオ・ロマーノの手になるハーマイオニ像を見に出かける。当時のイングランドでは、実物そっくりに彩色を施して、自動で動く彫像を作り出す技術が進んでいた。たとえば、水力などで動く彫像は、アン王妃のサマーセット・ハウスで見られた (Tigner 128)。ほぼときを同じくして、イニゴ・ジョーンズは、機械仕掛けの舞台装置を宮廷仮面劇に取り入れた。劇作家は、そのような美術の流行を取り入れ、材源にはないハーマイオニ像を創造したと考えられる。そして、「本

当にあの像を動かし、台から降ろし、お手を取らせてご覧に入れる」(“I’ll make the statue move indeed; descend, / And take you by the hand”) (V. iii. 88-89) ために、ポーライナは、次のような条件を居合わせたレオンティーズたちに要求する。

It is requir’d

You do awake your faith. Then all stand still:

Or — those that think it is unlawful business

I am about, let them depart.

(V. iii. 94-97)

ポーライナは、彫像に生命を吹き込む術を「不法な行い」(“unlawful business”) とみなす人々に退出を求める。前に、レオンティーズは、彼女を魔女と呼び、彼女の言葉にまったく耳を傾けず、宮廷から追い払おうとした。だが今、レオンティーズは、ポーライナの術を「これが魔術なら、魔術を食事同様の正当な行為」(“If this be magic, let it be an art / Lawful as eating”) (V. iii. 110-11) として認める。ジェームズ一世が偶像崇拜を教皇主義として徹底的に攻撃していたことはいうまでもない。

しかし、その偶像崇拜的な雰囲気強調しすぎるとき、ともすれば、その内奥の意味を見過ぎしがちになる。そのことは、ポリクシニーズがポーライナに「彼女が今までどこで生きておられたのか、はっきりと話していただく」(“make it manifest where she has liv’d”) (同 114) と問うたことからわかる。すなわち、彼は、ハーマイオニがどこかで秘かに生きていたことを即座に理解して、その苦勞に共感を示そうとし、偶像崇拜とは異なる次元で彼女に問いかけているからである。そして、ポーライナの術が人

間の術と認識され、ハーマイオニの許しによるレオンティーズとの和解がなされることによって、本劇はクライマックスを迎える。

ただし、こうした驚嘆すべきことが実現するには、ポーライナによると、「信仰」が必要とされる。それでは、彼女のいう「信仰」とはいったい何を意味しているのであろうか。繰り返しになるが、レオンティーズの嫉妬と彼の常軌を逸した感情に直面したとき、彼女は、その感情を暴君と呼び、医者および助言者として、伝統的なヒューマニストの役割を果たしてきた。彫像の場面では、彼女の術は居合わせた人たちに人間的なものとして認められる。そのように考えるとき、彼女が求めた「信仰」とは、まさに人間が人間のもつ力を信じ抜くことによって、過去の罪悪や苦難が償われるとともに、死んだと思われたハーマイオニの復活と幸せな家族の再生を生み出す力ではなかったか。言い換えるのなら、ジェームズ一世が劇中の神々に重ねられ、舞台上の出来事が彼の計画であったとしても、彼女の言葉には、そうした伝統的な権威から解放されようとした時代思潮が示されている。

しかしながら、この和解によってレオンティーズの家父長的な権威が回復することも忘れてはならない。すなわち、彼はポーライナにカミロを夫とするように命じる。過去の罪を後悔し許されても、レオンティーズの絶対的な権威は変わらない。レオンティーズがカミロを重要な廷臣としてみなしていることにも注目するとき、彼の家父長的な権威の回復には、女性を男性優位の伝統的な夫婦関係のなかに取り込み、ジェームズ一世の家父長制度を強固に築き上げようとする劇作家の周到な戦略が見て取れる。だが、本劇が神の代理人を自認した彼の支配原理を支える構造であっても、ポーライナ、パーディタやフロリゼルに見られた伝統的なストア派の権威から解放されようとしたヒューマニスティックな言動は決して色あせるこ

とはないのである。

※本発表は、『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』（第24号，2022年3月）に掲載された『『冬物語』における王権とヒューマニズム——新たな時代を前にして——』を公開講座向けに大幅に改稿したものである。

References

- Bacon, Francis. "Of Counsel" in *Collected Works of Francis Bacon*, eds., James Spedding, Robert Leslie Ellis and Douglas Denon Heath, Vol. VI. Routledge, 1996.
- Bullough, Geoffrey. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. Vol.8. Routledge and Kegan Paul, 1973.
- Crane, Mary Thomas. "'Video et Taceo': Elizabeth I and the Rhetoric of Counsel." *Studies in English Literature* 28, 1-15, 1988.
- Davies, Godfrey. *The Early Stuarts 1603-1660*. Clarendon Press, 1987.
- Ferguson, Arthur B. *The Articulate Citizen and the English Renaissance*. Duke University Press, 1965.
- Hooker, Richard. *The Works of That Learned and Judicious Divine Mr. Richard Hooker*, ed., John Keble. Vol.1. Regent College Publishing, 2009.
- James I. *The Workes*, eds., Fabian, Bernard, Edgar Mertner, Karl Schneider, and Marvin Spevack. Georg Olms, 1971.
- Jensen, Phebe. "Singing Psalms to Horn-pipes: Festivity, Iconoclasm, and Catholicism in *The Winter's Tale*." *Shakespeare Quarterly* 55, 279-306, 2004.
- Kurland, Stuart M. "'We need no more of your advice': Political Realism in *The Winter's Tale*." *Studies in English Literature 1500-1900* 31, 365-86, 1991.
- Lewalski, Barbara Kiefer. *Writing Women in Jacobean England*. Harvard University Press, 1993.
- Lim, Walter S. H. "Knowledge and Belief in *The Winter's Tale*." *Studies in English Literature 1500-1900* 41, 317-34, 2001.
- Matz, Robert, ed., *Two Early Modern Marriage Sermon*. Routledge, 2016.
- Tennehouse, Leonard. *Power of Display: The Politics on Shakespeare's Genres*. Routledge, 1986, repr. 2005.
- Tigner, Amy L. "*The Winter's Tale*: Gardens and the Marvels of Transformation." *English Literary Renaissance* 36, 114-34, 2006.
- Wickham, Glynne. "From Tragedy to Tragicomedy: *King Lear* as Prologue." *Shakespeare Survey* 26, 33-48, 1973.

シェイクスピアの『冬物語』におけるヒューマニズムと信仰

Williamson, Marilyn L. *The Patriarchy of Shakespeare's Comedies*. Wayne State University Press, 1986.

Yates, Frances A. *Shakespeare's Last Plays: A New Approach*. Routledge and Kegan Paul, 1975.